音楽劇「のこされた微笑

ーある死刑囚の最後の朝に」

鈍器奉天

全一幕

舞台は、一面にたんぽぽの花咲野原と、上手前には絞首台が横についた死刑囚独房。バベルの塔も下手やや後方にだんだん高く築かれていく。

登場人物:晃(死刑囚)

男の子(晃の分身)

母(晃の母)

かよ(晃の恋人)

たんぽぽたち(少女たち)

動物たち(少年たち)

人々(コロスとして風景の一部にもなる)

第一場

Beethouen Symhonie No.6 2nd movement

自然を表すように音楽が美しく流れ出す。日本のとも西欧のともいい難い音楽、それがだんだん明るいたんぽぽの音楽になっていく。母とかよもその中でそれぞれ離れたところにいる。動物たちもたんぽぽたちと楽しげに踊りながら遊んでいる。男の子と動物、タンポポたち遊んでいる。

♪ たんぽぽの花が咲いている〜

女声立ち上がり彼らに訴えかける。男たちはゆったり楽しんでいる。歌が終わると花園F.O.

第二場

死刑囚の独房。母とかよの顔もどこかにあらわれる。

殺してやる！人殺し！死ね！の声が

父をかえせ、お兄さーん　ーーーF.O.

Mozart Symphony No.40 3th.Mov.1フレーズ

晃、恐怖を抑えてから。

晃「おかあさん、ほんとに思いがけないことになってしまい、すみません。やり残 したことはまだまだいっぱいあるし、おかあさんと別れるのもつらいけれど、今度のことは、ただ耐えつつ、受け入れる以外にはありません。

でも、ソレは、ぼくひとりのことで、おかあさんに与えつつある悲しみの責めをまぬがれることは、むろんできません。ゆるしてくださいね。おわびに、天国へ行ったら、おかあさんのために山ほど祈り、守ってあげますね。だから、お母さん、もう泣くのはやめなさい。

かよちゃん。君の手紙がつきました。元気そうでよろしい。…

かよちゃん。ほんとに悲しいことだけれど、いよいよお別れしなければなりません。コレは冗談ではないのです。母をよろしくね。

何だかねむい。死を前にして、ねむいなんて一寸した大人物になったようですが、ほんとはこれはいろいろあって精神的に疲れているためです。みかんでも食べることにしましょう。かよちゃん、君にもあげるから一寸いらっしゃい。(食べはじめて)

…とっても静かな晩。」

♪ 「きょうはやすらかに」のメロディーのみが流れだす

第三場

やがてそのメロディーが消え、場面は下の花咲く野原に戻る。動物たちから成長した子供たちは大きな自然と向かい合い、

♪ こんなに空が、こんなに海が青いのメロディーが流れだす

第四場

〔夜8時過ぎ〕

歌が消え、いつしか再び独房が現れる。花園も見えている。

「こんなに空が」の①

晃「おかあさん。もうあえなくなるなんて…ユメではないんだろうか?ユメならさめればいいのに…と思うのだけれどもやはりユメではない。だからこの一瞬一瞬を大だいじにしましょう。ほんとに長いようで短い一生でした。いろんなことがありましたねぇ。いろんなことが…そしてやっと今、僕も少しはましな人間になれて、おかあさんに幸せになってもらえそうな気がしていたのに、またこのためにいっさいが灰色になってしまいました。ごめんなさい。

②晃のソロ

③

天国でおかあさんを待っています。それまでおかあさんを天から守りつづけてあげます。ね、やはり、ぼくがいちばんおかあさんを知っているし、ソレにふさわしいから。ときどきいたずらもするし、甘えたりもするけどね。…

④

このあと、かよちゃんにも話して、またおかあさんにも話して、なんでも話して、まるでぼくが生きていて、おかあさんに直接そばで話しかけているような気持ちでいたいんです。

⑤

むずかしいこともずいぶん考え、むずかしい本も読んだけれど、ぼくはやはり、ヒトはありのままの、ちょっとアホみたいなところや、ケッタイなところのあるような人が好きです。自分がそうだから、よけいそう思う。

ほんとうにふしぎな気がする。どうしてぼくは、おかあさんを悲しませることをしたんだろう…」

⑥ Gdurで混声合唱

第五場

花咲く野原

Mozart 40-3章

そう、世界は美しく完全だった…

でも、どうしてだろう、何かの足音が聞こえてくる。

男の子が今迄聞いたことのないような足音だ、近づいてくる…

♪ 狂気の音楽がはじまる。それが後のキャッチボールの音楽につながってゆく。

あれは仮面を被った大人たちらしい。圧倒するように子供たちのところに迫ってくる。あっ、花たちが踏まれる、踏み潰される…次から次へ、どうすればいいのだろう?大人たちはこの野原をあけわたすよう迫る。この花咲く野原にバベルの塔を建てるのだ、という。

そして再び大人たちは一斉に花を潰しはじめ、その大人たちの誰かが、母とひとつの花=かよを棒でつき倒した。花たちは男の子に救いを求める。

男の子はその棒を奪い取り、その大人になぐりかかる。

大人はあっけなく倒れるが、男の子は調子にのってさらにその棒でたたき続ける。みんなはやしたてるように見ている。そのうち、男の子に刺激を受けた少年の何人かは他の大人にもなぐりかかる。次から次へ…

男の子は彼を好きだったひとつの花＝かよにやっと止められて、はっと気づき、周りを見るとたくさんの大人たちが倒れている。

大人の仮面が割れて、その下にあったのは何と子供の顔、他もそう、仮面の下はみんな子供たちだったのだ。

殺しに参加した他の少年たちは死体の前で大きく懺悔の気持ちを表現するが、男の子はたちつくすのみ。非難の視線が男の子に集中する。ついに男の子はやけになり、棒をもって再びあばれ出し、誰かれなくなぐりかかり、さらに何人かを殺してしまうが、やがてとり押さえられる。

第六場

〔9時前〕

独房。晃は一人独房でやっと恐怖を乗り越え

晃「とても静かです。大事なハナシをしようと思うのですが、うまく言えません。母のこと、よろしくね、これが、もう最後になってしまうのだけれど、かよちゃん、あまり悲しまずに、少しずつ悲しみから立ち直って、ね。

母も今頃、きっと泣いているだろうね…

でもそれがあたりまえで、信仰があるから死なんて…っていうのはまちがっています。死の別れは悲しいのが自然です。悲しんで、悲しんで、そのあとその悲しみをすべて神に捧げられたら、ソレがいちばんすばらしいはずです。

それにしても、きみのおかげで、ぼくの日々は本当に楽しかった。今迄毎日こうしてニコニコしつつすごせたのは、きみのおかげです。

わが最良、最愛の友よ、

ありがとう！

母に天国から守っててあげると約束しましたが、君の守り神にもなってあげるね。ぼくはかくもおもしろく、また荘厳荘重なので、君がシスターになってからもいたずらしそうになるといけませんからね。それに第一、母も君も危なっかしい者同士だから、やはりその必要がありそうです。

いつまでも君の上に君臨することに決めましたよ、うふふ…

死の用意はできたし、このままずっと語り続けたいけど、少し眠ることにします。時間がもったいないけど、寝よう、君も早く寝たまえ。

悲しいとき、苦しいとき、ひとは寝ることで、新しい力を与えられるものです。かよちゃん、子守唄を歌ってあげるね。」

♪ 今日はやすらかに、友よただ静かに

静かにおやすみ、そっとおやすみ…

晃の歌声から入れ替わって、いつしか母とかよの2重唱に発展していく…

第七場

見よ、あまりの苦しみに思わず男の子は独房に飛び込み、晃とぶつかり、向かい合う。晃を見つめて、男の子は大声をあげて倒れる。晃は落ちついた様子のまま。

第八場

〔12時近く〕

独房の隣に絞首台がはっきりあらわれる。

晃「なんだか寝つかれないので、とつおいつ、こしかたをふり返ってみたり、その時に備えて手抜かりがないかと考えてみたり、おかあさんが『私が代わってやりたい』と言ってくださったことばを思ったり、ほっぺたのあたたかみを思い出したりしています。

今、何してるの?ぼくのためにお祈り?早く寝ないとからだに悪いよ。

ほんとに静かな晩。犬が遠くで鳴いています。なんだか、ほんとにユメのようですね。人の一生にはいろんなことがあり、苦しみの時は無限に思えるけれど、過ぎてしまえばまさに一瞬。ただただ、おかあさんの優しかった、大きい、深い愛ばかりが思われます。

さて、また寝よう、今度はねむれるかもしれない。あした、ネボケマナコじゃあ、みっともないからね、ぼくは、ごくふつうの自分であちらに逝くつもりです。別に聖人のように見られたいと思わないし、あるいは愚かにもなりたくない。今、自分の家に自然と湧いてくる1つの力に期待して、ゆっくりと静かに、一歩一歩歩みたいのです。

ごく自然に！で、ごく自然に寝るとしよう。」

♪ 再びおやすみの歌が流れ

第九場

晃、恐怖をおさえ

晃「お早う！かよちゃん、布団の中で、今日は母と君と、仔猫の写真を胸に入れていくことにきめました。

毎朝いつ死のおむかえが来るかと脅えているうちに、ぼくはいつからか、『死は受け入れるものだ』と考えるようになっていました。やはり、死には厳粛な、そして深い意味があると思います。

かよちゃん、君にとってもやがて死は現実となるでしょう。でもぼくが今から先に死の世界に行っておくから、安心して来てください(?)

あまりに泣くと、かわいいその目がはれますよ。」

「おかあさん、ぼくのためにたくさん祈って下さったことでしょう。ありがとう。もうすぐぼくがいなくなってしまう、そう思って今ごろまた泣いているの?ほんとうにごめんなさい。

でも、おかあさんに百ぺんもお礼を言いたい。ありがとう!」

晃は恐怖に打ち勝とうとして歌いだす。

♪ 晃「かよちゃん、甘えたいときは天をみなさい。

悲しいときも、嬉しいときも、

天をみなさい、

ぼくはソコにいるのですから。

ぼくの大好きなおかあさん、優しいおかあさん、いいおかあさん、愛に満ちた、ほんとにほんとにすばらしいおかあさん、世界一のおかあさん、

さようなら!

でもすぐ会いましょうね。だからあまり泣かぬように。

さようなら、百万べんもさようなら!」

再び誰かが落球。今度は皆に気づかれる。男の子もその場で立ちあがり、晃を見つめる。

意を決した晃は絞首台をのぼりながら

「かよちゃん。

じゃぁ、お元気で!

ぼくは今、にっこりほほえみつつ、きみにむかって手を振っていますよ。

さぁ、きみもそうしたまえ。

さようなら。

今こそ、ぼくはおかあさんのすぐそば、いえ、ふところの中ですよ、

お母さん！！

かよちゃん、じゃぁ…またね。」

看守、晃の首に縄をかけ、ムゾウサにつき落とし、縄だけがぶら下がっている。

「こんなに空が」の⑥かGdurでforteで混声合唱

⑦が流れる中

ー幕ー

生 命 の 歴 史

音楽劇「のこされた微笑 」のために

何故宇宙があり、地球があるのかわからない。しかしいつしかこの地球に生物らしきものが発達し、海から地上へあがり、さらに高等?生物が遊ぶ、というこの世界はバランスのとれたエデンの園になった。

そして、人が誕生し、楽しくゆかいな村の風景があちこちに生まれる。

ところがあるとき、誰かが神=自然を疑いだし、もっと幸せになりたい、と思いはじめる。不安、と言うものが皆の中に生まれだす。何故、神を疑い出したのだろう?このことが一番の問題だ!

神を信じられなくなった者達は、当然、自分達の知恵で何か工夫をせずにはいられなくなる。皆の知恵を寄せ集めては知恵の塔を作り出す。それはバベルの塔、と名付けられる。

さて、人々は何につけてもバベルの塔を頼るようになっていく。そして、そのバベルの塔を、もっと高いものにと知恵をかき集めて積み上げようとする。高く、もっと高く、神よりも…

自然と言う神を見失った人々は、自然の1部を壊しては、バベルの塔をあちこちに、自分の身近なところに建てはじめる。自然よりもバベルの塔の方が信じられるのだ。

あちこちにあるバベルの塔。…それぞれ寄せ集めた知恵がちょっとずつ違っているため、同じ答えがかえってこない。人々は自分のところのバベルの塔が正しいんだ、と言い争いをはじめる。自分たちだけの幸せを求めだす。

やがて殺人が始まり、この主人公のような悲劇が数限りなく生まれ、さらには戦が始まり、ついには地球や宇宙が深い傷を負いはじめ、自然=神は、ノアの方舟か、大爆発で人々を消滅させる。これは永久に繰り返される。

殺人と死刑囚

今は何という時代であろう!と怒り狂おうとしても、恐らくは、何の解決にもならないだろうという諦念と、どうせそうなら思い切ってやれるだけやってやろうという開き直った気持ちが心の中で同居している。問題は僕の精神力・体力でしかない。そうなのか?

僕は死刑囚に友人や知人が居る訳ではないが、ぎりぎりのところに追いつめられた人を想うと、いてもたってもいられなくなって、世の軽い世相に自分を順応させていくことなど、どうしてできよう!

人は想像力、と言う点で、他の動物達よりかけ離れた力を持っている筈だと思うのだが他人の不幸など自分の不幸で手いっぱいで想像などとてもできないのだろう。勿論僕だって殺されていく死刑囚のことをいつも考えているわけではない。考えている訳ではないからこそ、他の人々もどうぞ思いかえしてほしい。彼等の心をみんなが考えれば、こんなひどいことをすぐにもやめられる…と考えるのが甘いのなら、彼等の心が少しは休まるかもしれないーーー

公の裁判によって死刑を宣せられ、極悪人と、人々から思われた儘、死刑の執行を今か今かと恐れて生きる人の心…無実で死刑にされる人のいることも、いろいろ紹介されているようで、少しは人々の関心を寄せているようだが、私はむしろ、実際にひどいことをしてしまって、殺されゆく人々の方に関心がある。何故なら無実で殺され行く人はおそらく怒りのようなもので、死の恐怖をいくらかは鎮められるかもしれない…。だが、大罪を犯してしまって死を待つ人は何と思って死ぬのか?「悪いことをしてしまった」だから仕方ないと諦めて、殺されるのを待つことができるのか?私ならとてもできない、絶対にできない。せめて罪滅ぼしをしてから死にたい、何とか心を落ちつかせて、自ら或いは神の定めで死にたい。これを読む貴方は、絶対に大罪を犯さぬ自信がおありだろうか?どんな状況に追い込まれても滞大罪を犯さぬ人など、いるはずがないと私は思う。殺した人間は死ぬべきだ、目には目を歯には歯を、と言う言葉は、罪を犯したその時同時であればある程度わかるし、又は神の命、自然の命によりそうなるなら、当然のこととして理解もされる。しかし、同じ罪を犯すであろう同じ人間からある日突然殺されるのは、人が人をあやまって殺してしまうこととは全く違う殺人なのだ。目には目を、といってもその恐怖が違う、不安が違う、期間が違う、そのうえ人々からはさげすまれて死ぬのだ…

死刑囚のことについては実は何十冊かの本で私もさらにいろいろ身につまされるような思いで読みあさった。いろいろな立場の人がいろいろの考えで書いているが、死刑を目前にした人々の言葉は重く真実の魂がこもっている。

しかし私が申しあげたいのはそれだけではない。悪いのは殺人者だけではなく、そうさせた社会にも少なくとも半分は責任があるように思う。まず、だから、弱い人々に殺人を犯させないような社会状況でなくてはならない。例えば精神病から殺人を犯してしまわないように、精神病の人を多く作り出してしまうような社会状況を改めなければならない。精神的に弱い人から今の社会に認められず追い込まれ、ある時その反動からふと殺人を犯してしまったり、純粋な精神であるがゆえにこの社会に対応できず狂ってしまった人が、幻想にかられて殺人をしてしまう…連続殺人を犯す人だって、その殺人時の狂気の時間が長かったり、一人殺してしまったことから、ますます追いつめられてやけになり、殺人を重ねてしまうことなど、考えればすぐにわかりそうなことではないか!大切なのは社会の人々が互いに殺人とはこんなに恐ろしいことなのだと言うことを理解しあうことではないだろうか?人は殺人の罪の深さをよく知らずして殺人を犯してしまうのだ。そして鉄砲等の凶器を持たせないようにすることも考えなくてはなるまい。しかし、これよりももっと大事なことがある。

殺人は自信のない人が追い詰められた時に犯してしまう行為である、ということだ。自信のない人は、他の強いもの(鉄砲や核兵器)を味方にして、自分と対抗するものを殺そうとする。武器を持つと自信ができる、と思うのは錯覚だ。権力を持った人間が、そわそわ周りに気を配るのと同じことだ。一人一人が自信を持てるようになることが、殺人をなくすための一番自然で効果的な方法だと思う。自信といっても見せかけの自信は、自信ではない。世の中にはいろいろの能力を持った人がいて、いろいろの障害を持った人がいる。要はその各個人の特殊性を活かして、自分も元気に生きていけると思うようになることが、大切なことであろう。しかし、しかし…この世の中…